

こうした自然的・社会的条件が複雑にからみ合って、酪農は北軽第1地区では成立しやすく、第2地区では成立しにくくなっているのである。

酒匂川右岸地域の地理学的考察

諸 星 弘 子

調査地域は神奈川県西端に属し、行政的には南足柄町・開成町・小田原市の一部を含み、酒匂川沖積地と箱根火山地域から成立している。調査の目的を自然(特に地形)をベースとして展開される経済活動(主に農業構造とその変化)に主眼点を置き、この地域の地域性を追求することにした。

酒匂川の沖積地は勾配が急で特に上流部は高燥な扇状地的性格が強く、下流部に至り三角洲性になる。沖積面は氾濫の時に残された微高地面と掃流により洗われた旧氾濫原面に分類される。箱根火山地域は外輪山斜面、火山性fan、そして新期カルデラ形成直前に噴出した軽石流からなる丘陵があるが、共に輝石安山岩質の礫と軽石、それを被り厚いロームからなる。軽石流丘陵の周辺部には狩川に沿い二段の段丘と、酒匂川に沿って一段の段丘が見られる。狩川段丘は箱根火山系の輝石安山岩の段丘礫とそれを被いラビリ、スコリア混りの荒いローム層から構成されている。酒匂川本流の段丘は富士火山系の玄武岩質のきれいなラミナ層をもつ砂礫とロームからなるがその段丘と各地形面の対比は、比高、開析度、ローム層の中に含まれるスコリア、ラビリ層を示準として行った。

平野部の農業は肥沃な土壌、豊富な水に恵まれ単位収量、品質共にすぐれ神奈川の穀倉地帯を成しているが、近年富士フィルムを中心とする工場群の増加などの都市機能の増加とともに水田面積の減少、利用率の低下現象が目立ち、1毛田がS35年に22%であったのがS40年には70%に急増して粗放化が著しい。水田農業は農業用水の問題、農業慣行、そして開成町の農業構造の三点から考察した結果、都市化による農業の分解は著しく、工場・住宅地化の影響(工場の増加で)・労働力の流出・農業用水路の不備・古来の農業水利慣行等により、生産性の停滞が激しく、多くの農家は土地を農業の手段というより、投機的な意味で値上りを待っている現状にある。丘陵部では商品作物としての柑橘栽培が農業の中心で、このミカン園は戦後特にS37年前後に急増した新興産地である。ミカン栽培は、(1)多額の資本が必要、(2)生産性が高い、(3)多年性の為1.0年位は経済的に採算が合わない、(4)高度の栽培技術と市場対策の知識を必要とする点などで、水田農業と異なるが、ミカンが特に年平均1.5℃以上の温度を必要とする温暖作物であるため、その地域は経済的栽培の限界地である。日本全体のミカン主産地が西部に移行している現在、この地域が比較的遅く主

産地となり得たのは、東京市場に近い事、気候条件により品質が悪い(酸味が多く皮が厚い)点を逆に利用して貯蔵ミカン中心にする事、農協の指導で共同選果場の建設など市場対策に積極的である事 etc あげられるが、不利な自然条件を克服しようとする前向きな姿勢が見られる。

農家構造の実態は刈野部落を選んで調査したが、水田農業と柑橘農業の相違点が都市化の影響を受けた地域でどのように影響するかをもっと深く研究したかったが勉強不足と知識不足から充分考察できなかったのは残念である。

六日町盆地の地形と土地利用

— 四扇状地の比較 —

林 原 陽 子

論文の構成は次のごとくである。

第1章 調査地域自然地理的概説

第2章 扇状地の地形

- § 1. 四扇状地の地形及び水文
- § 2. 地形分類
- § 3. 地形的構造に関する考察

第3章 土地利用

- § 1. 人文地理的概説
- § 2. 土地利用の変遷
- § 3. 土地利用の現況
- § 4. 農業水利及び農地開発
- § 5. 四扇状地における土地利用の差異に関する考察
- § 6. 四扇状地における農業経営

第4章 土地利用から見た六日町盆地の地域性とその要因

調査地域は新潟県と群馬県との県境近く、東を越後山脈、西を魚沼丘陵に挟まれた地向斜谷であり、盆地の中央を谷川岳に源を發した魚野川が北流し、魚沼丘陵を横谷でうがって信濃川に合流している。東西山地からの支流は盆地床に多数の扇状地を形成したが、それらは背後の山地の地形を反映して、西側の拗曲崖下のものは急傾斜で面積は狭いが整形のものが多く、東側のものは緩傾斜